

一揆とは

～以下、書評「一揆の原理—日本中世の一揆から現代のSNSまで（呉座勇一 著）」

＜中島岳志(北海道大学准教授・アジア政治) 評＞（朝日新聞<12.11.25>）より～

注：・・・・・・は省略部分。〔 〕は補足部分。太字は引用者が強調のためにそうしました。

現代に通じる 人と人のつながり

一揆というと、農民が竹槍（たけやり）を持って武装蜂起する革命的イメージが共有されている。実際、「前近代日本の固有の階級闘争」という枠組みが与えられ、弱き者の連帯による権力への抵抗という像が確立してきた。しかし、・・・・・・それは「事実に基づくものではなく、戦後の日本史研究者の願望によるもの」だ・・・・・・。 **暴動や革命といった特殊な運動よりも、人と人をつなぐ具体的な紐帯（ちゆうたい）にこそ、一揆の本質がある**・・・・・・。

一揆の黄金時代は中世。従来の見解では、中世社会の間人は支配・被支配の封建的上下関係に縛られてきたとされる。しかし、中世の主従関係は、必ずしも絶対的ではない。実際は、互いに義務を負う双務的な関係として成立し、中世ならではの契約関係が誕生した。

この契約は、水平的関係においても成立する。そして、ここに「一揆契約」という観念が立ち現れる。

一揆の結成は、血縁を超えてなされた。人々は旧来の縁を切断し、新たな縁を結ぶことで、仲間を形成した。 **これまで赤の他人だった人々と契約を結び、疑似的な親子兄弟関係を構成することこそ「一揆契約」だった**のである。

一揆は、時に集合せず、目立つ決起集会も行わなかった。熱狂や神的儀礼も伴わず、 **たった二人だけの契約に留まることもあった**。大規模な武装決起だけが、一揆の姿ではない。

「相手にふりかかった問題を自分の問題として考え、親身になって、その解決に協力する」ことこそ、一揆における人間関係だ・・・・・・。そして、現代のソーシャル・メディアによる「新しいつながり」との類似性 [がある]・・・・・・。

ござ・ゆういち 80年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科研究員（日本中世史）。